

二〇二二年度 入学試験問題 帰国生

国 語

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから六ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・ 記号・句読点がある場合は字数に含みます。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

★行動主義心理学が（ア）シユリユウであった一九五〇年代まで、人間の行動も動物と同じく、学習は適切に報酬や（イ）罰（1）を与えることによって、成立すると考えられていました。A、人間が行動を起こすためには、先に説明した★オペラント条件づけのねずみのように、アメとムチの力が必要であり、外からの働きかけがないと、われわれは行動を起こさないと考えられていたのです。

このように、人間やある種の動物が外からのやる気よってのみ行動するという考え方が心理学の世界に（イ）クンリンしていた一九五〇年代、アメリカのウイスコンシン大学で、ある実験が行われる予定でした。そこで、実に興味深い（奇妙な！）現象が偶然に発見されました。

ウイスコンシン大学の心理学者たちも、例外なく行動主義心理学について学び、霊長類の行動を世界に先駆けて研究していました。この時は数匹のアカゲザルを用いて、アカゲザルの学習に関する実験を行っていました。彼らは、仕掛けのある機械的なパズルを実験に使用しました。このパズルを解く（仕掛けを外す）ためには、突き刺さっているピンを抜き、留め金を外し……といった六つの（ウ）テジユンが必要になります。

私たち人間にとっては、それほど難しいものではありませんが、体長が五〇センチメートルほどしかないアカゲザルにとっては、困難な作業だったに違いありません。

ウイスコンシン大学の心理学者たちは、オペラント条件づけのねずみのように、報酬や罰を用いて、このパズルをアカゲザルに学習させる予定だったのですが、実験に先立って、このパズルをアカゲザルの檻の中に置いてみました。まだ実験は始まっていませんでしたので、ここでは報酬や罰は与えていません。何気なく（実験とは関係なく）、アカゲザルの檻の中に、パズルを置いてみたのです。

そうしたところ、心理学者たちは、予想もしなかったアカゲザルの行動を目の当たりにしました。なんと、アカゲザルは、報酬や罰を与えられたわけでもないのに、そのパズルを自ら手に取り、しかも熱心に、楽しそうにそのパズルで遊び始めたのです。

B 驚きだったのは、このパズルの仕掛けをすぐに理解するようになり、一二日もすると仕掛けを解く割合は増加し、三回に二回は一分もか

30

25

20

15

10

5

からずにこの仕掛けを素早く解いたのです。

今となっては当たり前前のこの光景が、なぜ奇妙なのかといいますと、先にも述べたように、その当時（一九五〇年代）、人間や動物は、アメやムチに代表される外からの働きかけがないと行動を起こさないと考えられていたからです。

しかし、（3）アカゲザルのパズルを解くという行動は、外からの働きかけがあつたわけではないので、外からのやる気（アメとムチ）の考え方は説明できません。パズルを解いたからといって、アカゲザルはご褒美（エサ）をもらえたり、褒められたりしたわけではないのですから。もちろん、パズルが解けないからといって、罰が与えられたわけでもありません。

ましてや、ピンをどうやって外すのか、どのようにカバーを開けるのか、誰もその方法をアカゲザルに教えたわけではありません。繰り返しのよって新奇性も失われるはずなのに、アカゲザルはひたすらパズルを解くことだけを楽しんでいたので。

なぜ、アカゲザルは「パズルを解く」という行動をしたのでしょうか？それは、アカゲザルはパズルを解くことに楽しみや喜びを感じ、その楽しみや喜びによって、パズルを解くという行動を引き起こし、持続させたと考えられるほかなかったのです。これはこれまで説明してきた、内からのやる気にあてはまります。

外からのやる気よってのみ行動を起こすという、当時の心理学の考え方は解明できないこの現象を前にして、ウイスコンシン大学の心理学者たちは、「課題に取り組むこと自体が内発的な報酬にあたる」という新しいやる気、すなわち、内からのやる気存在を発表しました。

そのため、彼らは人間の本質を真に理解するためには、この内からのやる気を考慮にいれなければならない、と強く主張しています。

C、この主張は、当時の心理学界では受け入れられませんでした。不思議に思うかもしれませんが、残念ながら、そうした考えが受け入れられる土壌がその当時の心理学の世界では整っていないからです。

長年、人々の間で確固たるものとして信じられてきた考えを覆すには、時間がかかります。D、「地球が太陽の周りを回っている」とする「地動説」が周知の事実となるには、随分と時間がかかりました。

地球にいる私たちは、太陽が東の空から昇って西に沈むのを目の当たりにしているので、「地球は宇宙の中心にあって、空に浮かぶ太陽や星が、地

60

55

50

45

40

35

球の周りを回っている」と考える「天動説」が、当たり前だったのです。⁽⁴⁾地球が動いているなんて、昔は、到底、信じられないことでした。

天動説は一四〇〇年もの長い期間、人々の間で信じられてきました。コペルニクスが一五四三年に、地球が太陽の周りを回っているとする「地動説」を初めて説いたときにはまだ観測キキもなく、まわりの人々を納得させるほどの観測結果を得ることができませんでした。

しかし、一七世紀に入ってから、望遠鏡が発明され、みなさんもご存じのガリレオが望遠鏡を用いて、一六一〇年に四つの衛星が木星の周りを回っていることを発見しました。この発見を皮切りにガリレオはいくつかの発見を重ね、「四つの衛星と同じように、太陽の周りを地球が回っている」とする地動説を改めて主張しました。しかし、一四〇〇年にわたって支持されてきた天動説への人々の信奉は根強く、地動説が広く受け入れられるには、まだ時間が必要でした。

その後、ガリレオの弟子であるカステリが、金星の満ち欠けや大きさの変化について、天動説では十分に説明できないことを主張し、ケプラーが惑星の運動は楕円運動であることを発見し、続いて、ニュートンが運動の法則、および万有引力の法則を発見するなど、その詳しい内容についてはここでは割愛しますが、これらの圧倒的な功績によって、地球中心説としての天動説は、完全に「カコ」のものになりました。

ここでは簡潔に天動説と地動説について述べてきましたが、地動説が私たちの間に広く受け入れられるようになるまでには、さまざまなすったもんだがありましたので、興味のある人は、ぜひ調べてみてください。

さて、ここで私が言いたいことは、長年、人々の間で確固たるものとして信じられてきた考えを覆すには、非常に時間がかかり、科学的に実証されたデータが必要になってくる、ということ。ア

科学的に実証されたと結論づけるためには、三つの条件が必要になります。一つ目は、研究対象となっているものをデータで正しく説明できるといふ「実証性」です。コペルニクスに足りなかったのは、この実証性になります。二つ目は、研究の結果が多くの人によって承認されるという「客観性」です。ガリレオに足りなかったのは、この点でしょうか。そして、三つ目は、同一条件では、同一の結果が得られるという「再現性」になります。イ

心理学も天文学と同様に「科学としての学問」であるため、ウイスコ

シン大学の心理学者たちの「人間には内なるやる気がある」という主張が正しかったことが再び別の研究者デシによって証明され（先に示した「再現性」）、その考えが広く知れ渡るようになるまで、アカゲザルの（その当時は）奇妙な行動を目の当たりにしてから、約二〇年の月日を必要としたのです。ウ

「内からのやる気」という研究のために、デシは同僚の心理学者と衝突し、その当時働いていたビジネススクールを解雇されました。しかし、デシは自身の生涯をかけて「内からのやる気」の研究に没頭し、研究知見を積み重ねていき、その知見は少しずつではありますが心理学界に浸透していったのです。エ

（外山美樹『勉強する気はなぜ起こらないのか』）

★行動主義心理学……観察可能な行動（反応）を対象とする心理学。
★オペラント条件づけ……えさや電気ショックなどを与えることで、ある行動を起こさせたりやめさせたりすること。

問一——(1)「罰」とありますが、この文章でこれとほぼ同じ意味で用いられている二字の語を抜き出しなさい。

問二——(2)「予想もしなかったアカゲザルの行動」とありますが、心理学者が予想していたのはどのようなことですか。解答らんに四十字以内で説明しなさい。

問三——(3)「アカゲザルのパズルを解くという行動は、外からの働きかけがあったわけではない」とありますが、なぜアカゲザルは外からの働きかけがないのに、パズルを解くという行動を続けたのですか。解答らんに一行以内で説明しなさい。

問四——(4)「地球が動いているなんて、昔は、到底、信じられないことでした。」とありますが、筆者がこの文章で、「地球が動いている（地動説）」ことに関する話を述べているのは、なぜですか。解答らんに三行以内で説明しなさい。

問五 次の文は、もともと段落の最後にあつたものです。その箇所を文章中の〔ア〕〔エ〕の中から一つ選び、記号で答えなさい。

それもちろん順調な道のみではありませんでした。

問六 〔A〕〔D〕に当てはまる語を次のア〜エの中から一つずつ選

び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア たとえば イ つまり ウ さらに エ しかし

問七 — (ア) (オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八 本文の内容に合うものを次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 現在では、「外からのやる気」による行動をアカゲザルがしたとしても奇妙だとは思われないが、一九五〇年代には、人間も動物も「外からのやる気」によって行動することはありえないと考えられていた。

イ 現在では、地球が動いていることは当然のこととされているが、人々がこのように信じるまでには長い時間がかかっていて、それ以前は、地球が宇宙の中心にあり太陽や星は地球の周りを回っていると考えられていた。

ウ 一九五〇年代のウイスコンシン大学で、アカゲザルにパズルを学習させる実験を行った結果、報酬と罰による学習よりも、報酬や罰を与えない学習のほうが課題を解く時間が短くなることわかった。

エ 一九五〇年代のウイスコンシン大学の心理学者たちは、アカゲザルの実験によって得た新しい考え方を、人間の本質の理解のために必要なことだと主張したが、サルと人間は全く異なるとして受け入れられなかった。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

女の子同士が教室のあちこちで、友情のチョココレートを交換している。その様子を、章太は自分の席からぼんやりと眺めていた。気のないふう

に。半分あくびまじりに。でも嘘だった。本当は興味津々。

女子の間でも、全員参加のルールがあるわけでもなさそう、とか。なので、あまり大袈裟にならないよう、みんなで気をつけているのかもしれない、とか。とはいえ、甘いお菓子の行き交う一年の楽しいイベント、つい

はしゃぎ過ぎて、キャハキャハ喜んだりしているやつもいる、とか。誰がどんな包みを手にしている、とか。どんな包みをもらった、とか。誰が絵里寿に近づいた、とか。

「なに見てんの、柴ちゃん」
学年一のジャンボ女子、気のいい岡さんから視線を怪しむ声をかけられて、

「べつにー、なんも見てねー。または光の粒子を見てる」
章太は明るくとほけた。これでどうにか難は逃れたはずだ。けれど、あ

とはあんまり目を向けられない。残念だった。そしてお昼休み、給食が終わってすぐの時刻に、いよいよざか爺が動いた。大好きなアイコ先生がチョコを用意してくれているかどうか。ひとりで確かめに行く覚悟は、もともとあったのだろう。それでもやけに気弱そうな笑顔を章太のほうに向けると、立ち上がって静かに教室をあとにした。

橋やんにも、同じような表情をしてみせたのだろうか。

「行ったのか、あれ。ざかちゃん、保健室に」
バスケの得意な同級生が、**A**「こちらに近づいて来て言う。

「だろうね」
章太は答えると、がんばれ、ざか爺、激がんばれ、と今日何度目かの応援を心の中でした。もう本人の姿はここにはないけれども。ひとり廊下を行く、大きな丸い背が目に浮かぶ。

その興奮が無意識に体を動かしたのだろうか。(1) 章太はつい意味もなく、橋やんの腹にパンチを一つ入れた。もちろんほとんどポーズだけ、かけらも痛くないはずのパンチだったけれど、急に攻められて、しかもそれが決まったことに橋やんはむっとしたみたいだった。

30

25

20

15

10

5

「あんだよ」

と、口をとがらせて、章太の腹にパンチを返して来る。ひどい。倍返しくらいの強さだった。

「いつてえ」
章太は言った。

「だって、そっちが先だろうが」

「うーん」章太がうなるあいだも、橋やんは警戒のポーズを解かない。自分だって、じゃれたようなパンチを打つてくることはよくあるくせに。でも仕方がない。章太は自分が折れることにした。「じゃあ、これで一回ずつな」

「わかった」ようやく橋やんが、握った拳を開き、すつ、と手をおろした。

「ほんじゃ。和解ね」と章太。親友のポーズを顔の前で取り、野蛮な友情確認は終了。俺らアホかも、アホの子かも、とやんわり反省し、あとは保健室までチョコをもらいに行った勇者の身を案じていると、やがてなんと

も言えない微妙な表情をしてざか爺は帰って来た。
橋やんと一緒に近寄り、

「どーだった。もらえた？」

章太が小声で聞きながら廊下へと押し戻す。

「うーん」

(2) 唇を大きく突き出したざか爺は、青いパーカーのポケットを指差し、

「もらえた」と答えた。

「すげえ」
ざか爺、大勝利。

「もらえたんだ、もらえたんだ。」

保健室のアイコ先生から、石坂氏、見事にバレンタインのチョココレートをゲットしましたー。根っからの保健の先生好き、保健委員ばかり四年の愛が実りましたー。大声で触れ回る準備を章太が整え、今にも軽やかに廊下を走り出そうとした瞬間、

「でもなあ」

大人顔の友人は残念そうにつづけた。

「はい。ふたりのぶん」

でも何？ 章太が不審顔で見返すと、ざか爺はパーカーのポケットに手を差し入れ、小さな四角いチョコを差

60

55

50

45

40

35

し出した。

ああ。

章太は顔をしかめた。大きなたのひらに二個。自分もコンビニでときどき買う、手頃な値段のバラ売りチョコが載^のっかっている。特別なラツピン^グは、なしで。

ひとまずそれには手を伸ばさず、

「ざか爺は。爺はどんなのもらった？」章太は **B** 訊^きねた。

「ん？」

不思議そうな顔をして、ざか爺はチョコの二つ載^のったてのひらを一旦閉じた。またポケットに差し入れ、もう一度出して開くと、同じチョコが三個載^のっている。「こういう感じ」と、ざか爺。べつに手品でもないのだろう。

「同じか。同じチョコか」

橋やんが重々しく言った。

「うーん。昨日、俺らが一緒に話しかけちゃったから、先生も気いつかつたんだな。こっちはいらなくて言ったのに。でも俺らの二個はおまけだから……」根が優等生の章太は話を無難にまとめようとする。と、ざか爺は遮^{さへ}るように、首を横に振^ふった。

「もっと他に、みんなのぶんもあるってさ。六年生で希望者は全員、男子も女子も保健室へ来て、つて。俺、それを伝える係になっちゃった」

しんみり言うざか爺の目の端^{はし}に、じとつ、とうるんだものが見える。「アイコ先生、きつと誰からも文句が出ないようにしてくれただな。」⁽³⁾ やさしいんだよ、先生」

そんなのがやさしいもんか。ずるいよ、アイコ先生。章太がちよつと怒^{おこ}りながら、

「⁽⁴⁾ 大丈夫、ざか爺はチョコ三個だから」

勢い込んで言うと、横で橋やんがうなずいていた。大人顔のざか爺はしばらく黙^{だま}って、自分のてのひらにある小さなチョコ三個を見つめている。やがて、

「あんがと」

少しおどけた調子で答えた。それから三人で校庭のひだまりに行く。とりあえずチョコを一個食べてみるように、章太はざか爺にすすめた。意外に素直^{すなお}に従^{したが}ったざか爺は、橋やんの陰^{かげ}でチョコをひとつ **C** 口^{くち}に含^くみ、しばらく舌の上で転がすと、

95

90

85

80

75

70

65

「うめえ、最高にうめえ」

と言った。思い切り、やけになったような口調で。⁽⁵⁾ うめー、と大空に叫^{よび}びそうな勢いだった。

「うらやましいな。ざか爺。あと二個もあんだべ、それ」

章太が白々しく言うと、

「おう。友だちがふたり、自分のぶんくれた」

ざか爺も白々しく応じた。章太と橋やんの親友のサインを、真似して顔の前でやる。微妙^{ちが}に違^{ちが}うそれを直しながら、橋やんと三人でサインを交わした。

そんなふうアイコ先生のチョコを友だちに譲^ゆったから、というわけでは当然ないだろう。

ないと思うのだけれど、章太はそのあと、教室の手前で女子に呼び止められた。

絵里寿だった。

瞬間、気絶寸前。

章太の体の中身は口から全部あふれ出て、廊下にとぼーっと広がっている。だらしなく。スライム状に。

どうにかそれに気づかれないよう、「なに」と応じた。橋やんときか爺が教室に入るのを、絵里寿は確かめるように見送っている。それから、

「放課後、ちよつと時間ある？」

可愛い声で聞いた。

「……ある」

章太は答えた。ふたりでちゃんと話すのなんて、妄想^{もうそう}以外ではいつ以来かわからなかった。

「そう」

絵里寿は満足げにうなずくと、

じゃあ校舎の裏にある池のところに来て。

放課後。

ひとりで。

ざわつく周囲を気にしたように、小声で、少し早口で言った。

「⁽⁶⁾ いいけど、なんで」

章太が訊ねると、絵里寿は、 **D** 笑^{わら}った。

125

120

115

110

105

100

問一

——(1)「章太はつい意味もなく、橋やんの腹にパンチを一つ入れた。」とありますが、この時の章太の心情を、解答らんに三行以内で説明しなさい。

問二

——(2)「唇くちびる」とありますが、顔の部分を使った次の一～五の成句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 猫の額 二 目から鼻へ抜ける 三 馬の耳に念仏
四 良薬は口に苦し 五 歯に衣を着せない

〔意味〕

ア ためになる忠告ほど聞くのがつらいものだが、すなおに聞いたほうがためになるというたとえ。

イ 頭の回転が速くて、利口で機転がきくことのたとえ。

ウ 土地や場所がひじょうにせまいことのたとえ。

エ 思っていることを、遠慮しないではっきり言うようす。

オ いくら注意されてもきき目がなく、知らん顔をしていることのたとえ。

問三

——(3)「やさしいんだよ、先生」とありますが、この時にざか爺じいはどのように感じていますか。ふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア バレンタイン前日に自分と一緒に章太と橋やんも話しかけに行つたので、その二人にも気を使っているアイコ先生の親切さを感じている。

イ アイコ先生が自分以外にもチョコを用意していたことに気を落とされているものの、アイコ先生のこと好きなのでアイコ先生を悪く思えないでいる。

ウ 自分以外の生徒みんなにチョコを用意して、チョコをもらえなかった生徒が不公平に感じないようにしたアイコ先生に感心している。

エ アイコ先生が自分以外にもチョコを用意したことを章太が知つたらきつとアイコ先生に腹を立てるだろうと予想して、アイコ先生を擁護ようごしなければと思つている。

問四

——(4)「大丈夫、ざか爺はチョコ三個だから」とありますが、この言葉には章太のどのような意図が込められていますか。解答らんに四十五字以内で説明しなさい。

問五

——(5)「うめー、と大空に叫びそうな勢いだった。」とありますが、ざか爺がこのようにしたのはなぜですか。理由としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大好きなアイコ先生から念願のチョコをもらえて喜びが抑えられなかったから。

イ 章太と橋やんが傷ついている自分を気遣つてくれたことが嬉しかったから。

ウ 周囲から隠れてこっそりチョコを食べることが楽しくて仕方なかったから。

エ チョコの中で内心は傷ついているのでなげやりな気持ちになつているから。

問六

——(6)「いいけど。なんで」とありますが、章太がこのように聞いたのはなぜですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問七

ア

A
D

 に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア おずおずと イ ふっと ウ こっそり エ すーっと

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 絵里寿えりすのことが気になる章太は教室で女の子たちの様子を見て探りを入れていたが、女の子たちがどのようにしているかはあまりよくわからなかった。

イ 橋やんがパンチに腹を立て仕返しをしてきたことに章太は納得がいかないが、結局は章太が我慢して仲直りし、親友のポーズで友情を確認し合った。

ウ 大人であるアイコ先生のことを思い続けて気持ちも伝えているざか爺と、絵里寿に気持ちを伝えられないでいる自分を比べて章太は情けなく思っている。

エ 絵里寿は章太が友人であるざか爺を気遣った優しい行動をしたのを陰で見えており、章太のことを見直したので声をかけてきた。

